

ホセ・マリーア・エレディア
「チョルーラ神殿にて」「ナイアガラ」 翻訳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花方, 寿行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006805

ホセ・マリーア・エレディア 「チョルーラ神殿にて」「ナイアガラ」翻訳

花 方 寿 行

作者について

イSPANIAアメリカ初のロマン主義詩人とも称され、故郷キューバのスペインからの独立運動にかかわって亡命生活を送り、キューバの愛国詩人としても評価されるホセ・マリーア・エレディアは、1803年12月31日、キューバ島東部の町サンティアゴ・デ・クーバにて生まれた。とはいえこの事からすぐさま、エレディアが生まれながらにして「キューバ人」であったと、短絡的にそのナショナル・アイデンティティを決定しては問題が生ずる。というのもイSPANIAアメリカ諸国のスペインからの独立運動が活発化する以前のこの時期、スペイン系白人（クリオーリョ）の移動は現在の国境線内に限定されるものではなかったからだ。

ホセ・マリーアの父ホセ・フランシスコ・デ・エレディアはスペイン領ドミニカの出身であり、黒人革命を達成したハイチによるドミニカ侵攻（1801年）を逃れて、プエルトリコ、ベネズエラを経て、1803年3月にサンティアゴ・デ・クーバへと移ってきたばかりであった*1。その後ホセ・フランシスコは植民地政府の司法官に任命され、ジャマイカ、西フロリダ、カラカスに赴任。その間何度もキューバに滞在している。特にフランシスコ・デ・ミランダとシモン・ボリーバルによる最初の独立運動が失敗した直後のカラカスに赴任したときには、反政府運動に生温すぎると批判を受けるほど現地の感情に理解を示しながら、植民地政府と現地勢力が平和的に和解するよう努力を怠らなかった。後年、カラカス出身の詩人にして当代きっての大人文学者アンドレス・ベリョは、息子エレディアの『詩集』を評した文章で、特に一段を割いてホセ・フランシスコ

*1 Lazo, Raimundo. "José María Heredia, el gran poeta cubano de la naturaleza y de la patria", José María Heredia, *Poesías completas*. México D. F.: Editorial Porrúa, 1985 (2a ed.). pp. IX-X.

への感謝の念を表明したほどである*2。かといって、ホセ・フランシスコが独立派だったということではない。スペイン政府に忠実な保守主義者であり、だからこそ「祖国」のために最善と思われる融和策を採ったのだが、その試みが失敗に終わった後は、幻滅と中傷に苦しめられる日々が続いたようである*3。ホセ・フランシスコは最終的にメキシコに移住。ここでスペイン中央政府から派遣される司法官から、現地副王領聴訴院の刑事事件担当判事となり、1820年に死去している。ホセ・フランシスコのこのような任地の移動は、現代人の目にはきわめて国際的なものに思われるが、実際には当時のスペインの行政区分であるヌエバ・エスパーニャ副王領の中の移動であって、決して特別なことではなかった。

ホセ・マリーアもまた、こうした家庭の事情もあって、ハバーナとメキシコの大学に通い、法律を学んでいる*4。父の死の翌年、1821年にハバーナに戻り、ハバーナ大学で学位を取得。亡き父からは新古典主義に基づいた教育を受け、自身はメキシコ時代から英仏のロマン主義作家を愛読し、両派の混淆をベースとする、19世紀初頭イスマノアメリカ知識人を特長づける教養を身につけたところは、ベリヨとも共通する*5。また代表作「 Cholulera 神殿にて」を含む作品を執筆・発表し始めたのもメキシコ時代であり、ハバーナに戻ってからは雑誌を発行したり、翻訳した劇が上演されたりと、作家として順調な活動を開始したかに思われた*6。

しかしこの頃、メキシコやキューバを取り巻く環境も、大きく変わり始めて

*2 Lazo, op. cit., p. X. および Bello, Andrés. *Obras completas, Tomo IX: Temas de crítica literaria*. Caracas: La Casa de Bello, 1981 (2a ed.), pp. 241-242.

*3 ホセ・フランシスコが晩年中傷に苦しめられたことについては、息子エレディアが1820年、父の死と前後する時期に書いた2篇の詩(「白髪となった我が父に A mi padre encanecido en la fuerza de su edad」 「父の性格 Carácter de mi padre」) で言及している。

*4 カラカス大学でも学んだというのが通説だが、在学記録は見つかっておらず、チャコン=イ=カルボは証拠に乏しいとしている。Chacón y Calvo, José María. *Estudios heredianos*. La Habana: Editorial Letras Cubanas, 1980, p. 116.

*5 Lazo, op. cit., p. X. チャコン=イ=カルボは、エレディアの教養の原点として、a) 若き日のメキシコ滞在中に形成された人文主義的教養、b) サラマンカ派詩人の影響、c) 偽オシアン、パイロン、ラマルティエヌらロマン主義作家への関心の3点を挙げている。Chacón y Calvo, *op. cit.*, pp. 118-119. 参照。なお、エレディアにおけるホラティウスら古典詩人の影響については、*Ibid.*, pp. 109-143. 参照。またカーリヤは、後世の評価とは逆に、エレディアが自らロマン主義者をもって任じたことはなかったと指摘している。Carilla, Emilio. *La literatura de la independencia hispanoamericana*. Buenos Aires: EUDEBA, 1964, pp. 117-121. 参照。

*6 Valdés y De Latorre, Emilio. “José María Heredia y Heredia (Noticia biográfica)”, José María Heredia y Heredia, *Antología herediana*. La Habana: Consejo Corporativo de Educación, Sanidad y Beneficencia, 1939, pp. XXII-XXIII.

いた。1820年以前、両地域において独立派は決して優勢ではなかった。ナポレオン軍のスペイン侵攻に始まる動揺は、これらの地域にも当然波紋を投げかけた。しかし1810年に始まった貧困層やインディヘナを中心とするメキシコの独立運動は、大土地所有者を中心とする富裕クリオーリョの協力を得られず、1810年代末には抑え込まれつつあった*⁷。キューバではこの時期、独立運動はほとんど盛り上がりを見せなかった。セビーリャ＝ソレルはその原因として、キューバでのスペイン本国出身者とクリオーリョの間の格差の小ささ、クリオーリョによる支持の重要性を認識していた植民地当局による、中央政府優位は変わらぬにしても、クリオーリョの政治参加をできるだけ認めるという政策、スペイン人とは異なるものと自己定義するようなアイデンティティ意識の希薄さ、貿易に基づく経済的な繁栄、そしてハイチ革命の記憶から来る、独立戦争の混乱が最終的にはクリオーリョ自体に致命的な打撃を与えるのではないかという不安を挙げている*⁸。

この間スペイン本国では、フェルナンド7世が復位、スペイン独立戦争中に高まりをみせた自由主義運動に対して弾圧を行う、保守反動政治を展開していた。しかし南米諸国の独立による経済的打撃や政治的混乱のため、フェルナンドに対する不満が高まり、1820年には叛乱がスペイン各地で勃発。フェルナンドは同年3月、自由主義的な1812年憲法の復活を認めた。

これが皮肉なことに、メキシコの状況を大きく変える。メキシコ人全て（先住民等のマイノリティ集団は除く）に参政権を与えるという自由主義的な政策は、現地クリオーリョ富裕層が従来享受していた政治的特権を奪い取るものであり、また先住民への強制労働の禁止も、大土地所有者の利益を損なうものであった。ここに至ってクリオーリョ富裕層も、独立に一気に傾くこととなる。その結果が1820年、イトゥルピデの発表したイグアラ綱領の下での、独立派大同団結であった*⁹。

これに対してスペイン中央政府は、メキシコの独立を阻止するための前線基地として、キューバを利用する。キューバはこの後、メキシコに取り残されたスペイン副王領政府と軍隊を、経済的・軍事的に支援することを求められるようになる。この当時、ヌエバ・エスパーニャ副王領の軍管区司令官代理を務め

*⁷ Sevilla Soler, María Rosario. *Las Antillas y la independencia de la América Española (1806-1826)*. Madrid, Sevilla: Escuela de Estudios Hispano-Americanos, 1986, p. 18.

*⁸ *Ibid.*, pp. 6-9.

*⁹ *Ibid.*, pp. 18-19.

ていたのは、自由主義派のフランシスコ・レマウルであった。しかしイトウルビデの下に集結したメキシコ独立派は圧倒的に優勢で、レマウルら副王領軍は、サン・ファン・デ・ウリョアに孤立し包囲された状態にあり、もはやメキシコ独立は事実上達成されたも同然であった*¹⁰。かくして1821年、メキシコでは制憲議会が招集され、22年にはイトウルビデが皇帝に選出される。

スペイン本国の政変は、メキシコだけでなく、キューバの状況にも波紋を投げかけた。先に述べたように、キューバでは独立運動はそれほど盛んではなく、また1811年に発覚した黒人による叛乱計画がハイチの記憶を甦らせたこともあり、それまで大きな騒乱は発生していなかった*¹¹。フェルナンド7世の復位後、保守反動政治が行われていた間、イスマノアメリカにおけるスペイン支配最後の砦となっていたキューバは、中央政府によるキューバ優遇政策のおかげで、経済的にも恵まれた状態が続いていた。その結果当然ながら絶対王政を支持する保守主義者が優位に立ち、自由主義者・独立支持者も、表立った活動は行っていなかった*¹²。

1820年の政変は、この状況に激変をもたらす。自由主義者は今度は優位に立つことになったが、それはスペイン本国の動きの結果であった。保守主義者は、それまでのキューバの繁栄はフェルナンド7世の絶対王政のおかげであり、自由主義者はこれに敵対する存在だとして、自由主義政府に反対するキャンペーンを張った。この中で保守主義者は、自由主義者はキューバの独立を目指し、これによって結果的にはキューバに害を為そうとしていると主張。自由主義者は逆に、自分たちはスペイン本国の動きを受けて政権を握っているのだとして、独立派という「中傷」に反論。自分たちこそが正統なスペイン支持者であると主張して、双方が争うことになった。この論戦が、自由主義的本国政府が印刷出版の自由を布告したことによって可能になったという事実が、事態の皮肉さを強調している*¹³。

こうした状況下の1822年、キューバではスペイン議会への代表を選ぶ選挙が実施され、自由主義派の代表が選出される。これに保守派が激しく抵抗、妨害工作を繰り広げ、さらにはクリオーリオ兵の排除を要求するキューバ駐留スペイン軍の急進派と共同で叛乱を起こすという結果になる。ここには奇妙なねじ

*¹⁰ *Ibid.*, pp. 18-22.

*¹¹ *Ibid.*, pp. 73-76.

*¹² *Ibid.*, pp. 84-85.

*¹³ *Ibid.*, pp. 88-93.

れが存在する。保守派はスペイン本国の政策変更によって、キューバ優遇策がなくなり、利益が損なわれると考えたからこそ、反自由主義闘争を行っていた。そこには本国の政策に対して、クリオーリョの自治を求める意識が存在する。一方自由主義派が政権を握ったのは本国の政変の結果であるが、選挙で選ばれた代表がみな自由主義派だったということは、キューバ人の間に自由主義が根付いていたことを示している。そして自ら選んだ代表を、保守派がクーデターを起こしてまで退けようとしたとき、初めて市民たちが武器を取り、「スペイン人くたばれ！ 独立万歳！」の叫びと共に、衝突が起こったのである。スペイン政府が、両派のいずれも支持していなかったことは、注目に値する。実際キューバの軍管区司令官代理セバ스티アン・デ・キンデランは両者の仲裁に奔走し、衝突の拡大を防ぐのに成功するのである。とはいえこの事件は、スペインから派遣されてきている軍隊に対する、クリオーリョの不信を育むこととなった*¹⁴。

しかしスペイン史においては「改革の3年間」と呼ばれるこの状態も、長くは続かなかった。スペイン本国では自由主義者が穏健派と急進派に分かれて混乱が生じ、さらに国王支持派がゲリラ活動を開始。またスペインにおける革命活動が活発化し、それが周辺諸国へ波及して行くことを恐れたウィーン体制下の列強は、1822年フランスに軍事干渉を要請。23年「聖ルイの10万の息子たち」と呼ばれたフランス軍がスペインに侵攻し、国王はフェルナンド7世のままだが、再び自由主義活動は弾圧され、反動政治が行われるようになる。

旧体制の復活を目指すフェルナンドは、イスマノアメリカにおける独立運動を食い止めようと、改めて活動を強める。その一方で、メキシコで副王領政府を代表して闘っていた自由主義派のレマウルは、自由主義派の拠点であるカディスがフランス軍の攻撃に陥落したとの報を受けると、絶対王制のスペインに仕えるくらいなら、財産を持てるだけ持ってアメリカ合衆国に亡命した方がましだする手紙を記しながらも、現地で最善を尽くしていた。こうした状況下、キューバはスペインからの補充部隊と、メキシコから引き揚げる部隊が交錯する拠点として、現地人ではない兵士で溢れかえることになる*¹⁵。

エレディアは1821年、こうした政治的激動がまさに始まったその時期に、メキシコを離れ、ハバーナに戻ってきたのである。彼は「暴君」「専制」に抗し、「自由」を求める闘いを称賛し、そのように行動するべく読者に檄を飛ばす詩を、その詩作活動のごく初期にあたる1820年から、早すぎた晩年といえる1835

*¹⁴ *Ibid.*, pp. 94-98.

*¹⁵ *Ibid.*, pp. 22-23.

年まで、一貫して数多く残している。しかし彼が当初より、「スペイン支配」からの「キューバ人」解放を求めた作品を書いていたと思込んでしまっただけで、問題が生ずる。1820年に書かれた「自由スペイン España libre」においては、フランス支配に抗するスペイン人の闘いが扱われているが、ここでエレディアはスペインを「祖国 patria」と呼び*16、フェルナンド7世を讃えている。この当時のエレディアは、明らかにスペイン領に住む者を一括するようなアイデンティティ意識を持っている。また「1820年 1820」では、スペインの軍事体制を称賛しているが、これはクーデターによって自由主義憲法を復活させた、本国の動きを意識したものである。

「1820年」の自由主義憲法復活称賛と、「自由スペイン」のフェルナンド7世支持は一見結びつかないようだが、エレディアにおいては、ナポレオン侵攻に抗して行われたスペイン独立戦争中に達成された、1812年憲法に代表される自由主義改革の成果が、フランス軍に対抗するスペインのイメージと密接に結びつき、それが独立スペインのシンボルだったフェルナンド7世とも切り離せないものとして意識されていたと考えられる。そのため1820年当時のエレディアの頭には、自由主義憲法支持＝スペインに対する愛国心＝フェルナンド7世支持という図式が、存在していたのであろう。

一方僅か2年後の1822年、メキシコの政治状況を念頭に書かれた「頌歌 Oda」には、同様な政治意識が異なるニュアンスを加えて表れている。この作品は先に述べた1820年の政治的激変の末、事実上スペインからの独立を達成したメキシコにおいて、皇帝に即位したイトウルビデに抗して書かれたものである。エレディアはここで、メキシコのスペインからの独立そのものは批判していないが、イトウルビデの反動政治を批判し、メキシコ人に対して暴君を倒し、自由主義的な改革を行うようにと呼びかけている。「頌歌」執筆時のエレディアにとって重要なのは、スペインに対する愛国心やフェルナンド7世支持からは切り離された自由主義の理想だったのであり、メキシコの独立については積極的な支持でも反対でもなく、現状追認という姿勢だったといえる。

したがってそんなエレディアが、1823年までの「改革の3年間」において、キューバにおける自由主義運動（独立運動ではなく）に関わりを持ったことは、不思議ではない。しかし23年にフェルナンド7世が反動政治を開始すると、キューバにおいても自由主義運動の弾圧が懸念されるようになる。その最中、ホセ・

*16 Heredia, *Poesías completas*, p. 10.

フランシスコ・レムスによって率いられた独立運動が開始された。レムスはコロンビアで独立運動に加わった経験を持ち、キューバに移住してから、ここで「ボリーバルの太陽と光 Soles y Rayos de Bolívar」と名乗る結社を組織していた。この結社はフリーメイソンの影響を受けた秘密主義を取っており^{*17}、学生と中流の下のクリオーリョ層、そして黒人を主たる構成員として、ハバーナを中心に、キューバ全土に拡がっていた。結社はボリーバルの下へ代表団を送り、独立運動への援助を依頼したが、ボリーバルは時期尚早としてこれを拒否。そこで結社はキューバ人だけの力で独立を達成することを目指し、23年8月に蜂起の予定を組み、キューバ人へは闘いへの参加を、スペイン人には戦闘の拒否と独立への理解を求めるパンフレットを、ハバーナで広めた。これに対して当局は素早く反応し、この運動に関わったものが続々と逮捕され、蜂起は未遂に終わった^{*18}。

エレディアはこの運動に加わっていたが、その程度については明らかになっていない。彼は「理性騎士団 Caballeros Racionales」の一員となっており、マタンサにおける結社の会合では中心的な役割を果たしていたとして、レムスをめぐる調書にも名前が挙がっていた^{*19}。蜂起計画が発覚すると、エレディアも当局の追求を受け、友人に匿われて潜伏生活を送ることになる。自らの果たした役割を過大評価していたエレディアは、報復を避けるべく、内戦を引き起

^{*17} フェルナンド7世が復位した1814年から1820年に至る絶対王制下のスペインで、反スペインの・親フランス派と見なされた自由主義者と、当時広まりつつあったフリーメイソン団員は、厳しい追及に晒されたが、それが両者を密接に結びつけることとなった。また亡命スペイン人自由主義者はイギリスに多く集まっていたが、この地ではフリーメイソンの活動が盛んであった (Sevilla Soler, *op. cit.*, pp. 102-103.)。

一方イスパノアメリカ地域へのフリーメイソンの浸透は、主として貿易を通して行われたため、リヴァプールやカディスといった貿易港が重要な拠点となっていた。自由貿易を望む彼らは、当然イスパノアメリカの独立派に接近していったが、同時にそのネットワークは、フリーメイソンと接近していた自由主義派によっても利用された。こうした経緯によって、19世紀前半スペイン・イスパノアメリカの自由主義結社は、フリーメイソンの色彩を強く帯びることになったのである (*Ibid.*, p. 103.)。ロンドンのフランシスコ・デ・ミランダの屋敷は、ロギア・ラウタロ (Logia Lautaro)、別名大アメリカ連合 (Gran Reunión Americana)、またの名を理性騎士団 (Sociedad de Caballeros Racionales) というフリーメイソン結社の本部でもあり、アンドレス・ベリヨもここに属していた。ただしその活動への関与の度合いは不明である (Cussen, Antonio. *Bello y Bolívar*. traducción de Gustavo Díaz Solís. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1998, p. 50.)。

^{*18} Sevilla Soler, *op. cit.*, 106-109.

^{*19} Chacón y Calvo, *op. cit.*, pp. 82-83. なお、チャコン＝イ＝カルボは、「理性騎士団」を「ボリーバルの太陽と光」の1セクションとしているが、注17で述べた「理性騎士団」の規模から考えて、どちらかといえば、「太陽と光」が「理性騎士団」のセクションであったと見なすべきであろう。ただし両者の具体的な関係は不明である。

こす意志がなかったことを、結社の代表であるかのように当局に書き送るが、追及の手は柔らかなかった*²⁰。

とはいえ逮捕者を待ち受けていた運命は、それほど厳しいものではなかった。厳罰はかえって現地主力勢力である自由主義的クリオーリョの反発を招くと考えた当局は、この計画を一部外国人の扇動によるものとし、602人にのぼった逮捕者のうち、最も重い刑としてキューバからの追放に処せられたのは、レムスを含む25人に過ぎなかった。大部分は釈放され、結社の主要メンバー2人に関しては、南米への脱走に当局が手を貸していた可能性さえ示唆されている*²¹。

しかしロマン主義的な想像力に富むエレディアには、このような展開は予想もできなかったし、受け容れることもできなかったと思われる*²²。エレディアは1823年11月14日、ボストン行のベルガンティン船でキューバを脱出、同年12月4日ボストンに到着する。かくして長きにわたる亡命生活が始まった。アメリカ合衆国においては、ニューヨークに居を定め、フィラデルフィアやナイアガラ瀑布を訪れ、詩作を行う一方、オシアンを翻訳し、シャトーブリアンに傾倒。スペイン人自由主義者トマス・ヘネルと親交を結ぶ。とはいえ南国キューバの出身であるエレディアは、アメリカでの生活、特に冬の寒さに馴染めず、メキシコへの移住を早くから考えていた。それでもニューヨークで1825年、それまで書き溜めた詩をまとめた『詩集 Poesías』を刊行、これが27年の『アメリカ総覧』紙上で、ベリョが好意的な評を残した版である。一方エレディアは『詩集』刊行後、友人がメキシコ大統領から獲得してくれた公式招待状の到着も待たず、同年8月22日メキシコへと出発。10月14日メキシコ市へ到着したときには、旅の疲れと途中麻疹に罹ったために、体調をひどく崩していた*²³。

メキシコでは時の大統領グアダルーペ・ビクトリアをはじめとする政府内の友人の引き立てもあったが、一方「外人 *extranjero*」登用を批判する勢力の妨害によって、五等官として職を得るのがやっとだった。「外人」というレッテルは、この後終生エレディアのメキシコでの栄達の妨げとなる*²⁴。これはわずか5年前まで、メキシコとキューバがスペイン領内の同じ行政区分であるヌエバ・

*²⁰ Lazo, *op. cit.*, p.XII.

*²¹ Sevilla Soler, *op. cit.*, pp. 109-110.

*²² エレディアは、キューバ当局による処罰が確定した後の1826年に書かれた書簡において、もし23年に逮捕されていたならば、自分はキューバかスペインの地下牢で獄死していたかもしれないと記している。Chacón y Calvo, *op. cit.*, pp. 83-84. 参照。

*²³ Lazo, *op. cit.*, pp. XII-XIII, および Valdés y de Latorre, *op. cit.*, pp. XXXIV-XXXV.

*²⁴ Lazo, *op. cit.*, p. XIII.

エスパーニャ副王領に属しており、先に記したようにそれゆえエレディアがメキシコとキューバを行き来しながら学位を取得したことを考えれば、驚くほど急速なナショナル・アイデンティティの変化であり、渦中に置かれたエレディアにとっては耐え難いものだった。またメキシコ在住の亡命キューバ人グループとの間でも軋轢が生じ、彼を苦しめた^{*25}。

しかしエレディアはこの逆境にもめげず、『シラ *Sila*』、『ティベリウス *Tiberio*』といった新古典主義的な、フランスの戯曲の模倣である悲劇を発表。雑誌を創刊したり、メキシコ科学芸術学院のメンバーに選ばれたりと活躍をし、27年には結婚もしている^{*26}。同年クエルナバカの第一審裁判所判事に任用されるが、ここでも「外人」の高位任用を禁じた法に妨げられ、降格を余儀なくされた。ベリョが移住先のチリで民法作成やチリ大学初代総長として活躍しながらも、異邦人として差別的に扱われることからくる疎外をかこつ20年も前に、エレディアはより直接的な法的排除に苦しめられたのである^{*27}。その後しばらくは活発に仕事をこなすものの、ビクトリアからゲレーロ、ブスタマンテとクーデターによって次々大統領が替わる混乱の中で、30年ついいには一時職を失うことになる^{*28}。

同じ1827年、エレディアはメキシコからスペイン人を追放するという政策に反対し、そのために2年後の29年に起きたスペインによるメキシコ侵攻計画(失敗に終わったが、これも当然キューバを前線基地として利用していた)に関与

^{*25} Chacón y Calvo, *op. cit.*, pp. 92-93.

^{*26} Valdés y de Latorre, *op. cit.*, pp. XXXVIII-XL.

^{*27} メキシコにおけるナショナル・アイデンティティ確立の迅速さには、この地の独立運動が南米大陸の汎アメリカ主義の影響を受けることなく、スペインvs.メキシコという対立軸を強調する形で展開したことが寄与していると思われる。しかしながら、メキシコと他のイスマノアメリカの間にはっきりとした境界が存在すると考えられるようになったのは、それほど以前のことはなかった。フェルナンデス＝デ＝リサルディが1816年に書いた『ペリキーリョ・サルニエント *El Periquillo Sarmiento*』では、主人公が帰属すべき共同体は、いまだスペイン帝国全体からメキシコ市周辺の限定された地域まで、極めて伸縮自在な輪郭を持つものとして想像されており、そこにはキューバやフィリピンも含まれていた。花方寿行『想像の共同体』と『ペリキーリョ・サルニエント』——B・アンダーソンの資料分析における問題点』『ラテンアメリカ研究年報』第22号(2000年)、88-90頁参照。同じリサルディが1820年に書いた『ドン・カトリン・デ・ラ・ファチエンダ』でも、罪を犯したメキシコ人の主人公はハバーナの監獄に送られており、この罰自体は特別なものとは見なされていない。ただし釈放された主人公は「メキシコ、我が祖国 *México, mi patria*」に帰ったと述べている。Fernández de Lizardi, José Joaquín. *Don Catrín de la Fachenda / Noches tristes y día alegre*. ed. de Rocío Oviedo y Alमुdena Mejías. Madrid: Ediciones Cátedra, 2001, pp. 129-130. 参照。

^{*28} Lazo, *op. cit.*, pp. XIII-XIV. および Valdés y de Latorre, *op. cit.*, pp. XLII-XLIII.

したという中傷に曝される羽目になる*²⁹。これは直前に書かれた詩「軍歌 Himno de guerra」(1826)、「ボリーバルに捧ぐ A Bolívar」(1827)で、スペイン支配に苦しんだ末に独立を達成したアメリカというイメージが繰り返し描かれていることを思えば、皮肉である。エレディアのスペイン人追放政策への反対とこれらの詩の両立は、彼がスペインによる植民地支配には強硬に異を唱えつつも、スペイン人そのものを憎んではいなかったことを示すものだが*³⁰、同時に追放という刑罰に対する、亡命者エレディアの嫌悪の表れでもあった*³¹。

この間メキシコにおいては、後の保守派と自由派の母胎となるエスコセス(スコットランド派)とヨルキーノ(ヨーク派)という二つのフリーメイソン結社が作られ、対立を深めて行く。エレディアはより自由主義的なヨルキーノ支持者であった*³²。この頃エレディアの詩がマドリッドで、アルベルト・リスタによって評価されたことから、ハバーナの新聞にも作品が掲載された。しかし31年には「黒鷲大軍団」陰謀事件に関与したとして、キューバ当局による死刑宣告を受ける。同年、逆にメキシコではトルーカの判事職を得て、この地で政治・文芸批評に活躍。32年には自らの手で増補改訂版『詩集』を刊行。相も変わらず「外人」として登用に反対する勢力の妨害にあうが、イグアラ綱領12条によってメキシコ住民全員に市民権が与えられていることを根拠として国籍問題に片が付き、同年メキシコ州第5回立法議会議員に選出される。しかし激務に体調を崩し、33年辞任。ただし法律及び教育関連の仕事は続けた*³³。

だがメキシコの内政は、混乱を極めていた。1822年に反乱を起こしイトゥルビデ追放の立て役者となって以来着実に力を強めていたサンタ＝アナが、保守派と自由派の対立を利用して、1834年大統領に就任。当初は自由派と提携したが、反乱の続発に方針を転換し、34年から55年まで、保守派と連携してメキシコに君臨することになる。内戦期にはブスタマンテ独裁体制を倒す自由派としてサンタ＝アナを支持したエレディアだったが、この時期からは保守的な中央政府の政策を批判し続けることになる。とはいえ自由派の活動にも幻滅を感じ

*²⁹ Lazo, op. cit., p. XIV.

*³⁰ Ibid., p. XIV.

*³¹ サンタ＝アナ政権は1833年、4年前に自由派のゲレーロを処刑した前政権の関係者を追放に処することを決める。これに対して本来自由派寄りであったエレディアは、追放は個人から法による庇護を全て奪い去るものであるとして、反対の論陣を張っている。Chacón y Calvo, op. cit., p. 103. 参照。

*³² Ibid., pp. 94-95.

*³³ Lazo, op. cit., pp. XIV-XVI.

るようになり、懸案の教育改革も予算不足等によって中止を余儀なくされ、エレディアはメキシコのみならず、イスマノアメリカ全体の将来に悲観的になってゆく^{*34}。1835年の詩「C・アンドレス・キンターナ＝ロー氏への書簡 Epistola al C. Andrés Quintana Roo」において、エレディアはメキシコの現状に思いをめぐらせ、「神聖なる自由よ！（中略）デマゴグは怒り狂い吠える、迷信と狂信が天を洗するように、そなたの名を汚しながら。¡Sagrada Libertad! (...) / (...) / La demagogia furibunda brama / profanando tu nombre, cual calumnian / superstición y fanatismo al cielo:」^{*35}と嘆いている。

この頃キューバの状況は、完全に現状維持に落ち着いていた。1826年のパナマ会議で、ボリーバルをはじめとする独立イスマノアメリカ諸国の指導者たちは、武力侵攻によるキューバとプエルトリコ解放について話し合っていたが、結局具体的な動きにはつながらぬまま機会は失われていた^{*36}。汎アメリカ主義の旗手であったボリーバルも1830年にこの世を去っており、キューバ国内における散発的な独立運動はほとんど反響を得られぬまま潰されていた。そうした状況下、エレディアは老いた母をはじめとする家族にもう一度会いたいという気持から、キューバ当局による恩赦を利用。1836年11月、遂にキューバに里帰りを果たした。しかしキューバの独立派や自由主義者はこれを変節と見なし、エレディアは郷里でよそよそしい反応に囲まれることとなった^{*37}。これに傷ついたエレディアは、翌37年1月には早々にメキシコに戻ることになる。しかしここでも保守政権に迎合しないエレディアへの風当たりは強くなり、同年国籍条項を遡って適用され、司法官職を解任、閑職に追いやられる。失意の中、結核療養のためクエルナバカに移るも甲斐なく、1839年メキシコ市に戻り、死去。享年36歳であった^{*38}。

翻訳

比較的短く困難に満ちた生涯を送ったため、エレディアの残した詩作品は、生前に彼自身が刊行したさして厚くはない『詩集』にほぼすべて収められている。メキシコ時代に発表した戯曲の評価は芳しくなく、彼の名声はあくまでも詩に拠っている。だがこの僅かな詩作品によって、エレディアは現在19世紀初

^{*34} Ibid., p. XVI.

^{*35} Heredia, *op. cit.*, p. 90.

^{*36} Sevilla Soler, *op. cit.*, pp. 48-51.

^{*37} Chacón y Calvo, *op. cit.*, pp. 179-181.

^{*38} Lazo, *op. cit.*, pp. XVI-XVIII.

頭イパノアメリカ独立期の3大詩人の一人として、ベリヨ、ホセ・ホアキン・デ・オルメドと並び称されているのである。ここではなかでもエレディアの代表作として名高い「 Cholula 神殿にて En el teocalí de Cholula」と「ナイアガラ Niágara」を翻訳紹介する。どちらもポルーア版 *Poesías completas* を底本として用いる。

なお「 Cholula 神殿にて」は、1820年に初めて発表されたが、1825年版『詩集』に収録されるに際して、加筆修正が施された*³⁹。さらに32年版『詩集』において、後半部分に改めて大幅な加筆修正が行われている。ポルーア版は32年版を底本としているが、現在スペイン語圏で最も流布しているのがこの版であるため、本翻訳の底本としても用いることとした。なお「 Cholula」の20年版は失われており、25年版も研究者でもまず見かけることはない。なおアンドレス・ベリヨが25年版『詩集』を批評した文章では、冒頭からかなりの長さにわたって「 Cholula」の引用がされているが、6連までは句読点や語句の小さな修正にとどまっている。7連冒頭は大意は同じながらそれまでに比べて大きく異なっているが、残念ながら引用はここで終わっている。ただ少なくとも32年の加筆修正が最後の3連に集中して行われたことは確認できる*⁴⁰。

ポルーア版の「 Cholula 神殿にて」には、特に断りもなく「1820年12月」との執筆年月の記述があるが、これは先に述べた加筆修正が行われる以前の、最初のヴァージョンの発表年月である。この時エレディアはメキシコで大学生活を送っている最中だったが、25年版は亡命先のニューヨークで、32年版は再び移住した独立後のメキシコで出版と、作者を取り巻く状況が変わるにつれて、それを反映する改稿が行われてきた。ベリヨが引用した25年版ではタイトルも「あるメキシコの詩の描写的断片 Fragmentos descriptivos de un poema mejicano」となっており、エレディアが現在みられるよりもっと長い作品の冒頭部としてこの作品を構想していた可能性がうかがわれる。もっともこのタイトルはベリヨが23年に発表した「詩神への誘い Alocución a la poesía」の副題「『アメリカ』と題する未発表の詩の断片 Fragmentos de un poema inédito, titulado “América”」に似ており、20年の時点で既に「断片」とみなされていたのか、「詩神への誘い」発表後にその影響を受けて新たな構想の下改稿されていたのか、判断はつけられない。現在手に読むことのできる32年版は終盤が大きく改められ完結した作品となっているが、そこではスペインからの独立達成

*³⁹ Carilla, *op. cit.*, p. 111.

*⁴⁰ Bello, *op. cit.*, pp. 238-240.

後内紛が続くメキシコの政情を反映して、内戦に対する批判が強く打ち出されている。

しかし本作の評価を高めているのは、ややメッセージ先行のきらいがある終盤ではなく、前半の自然描写である。これによって「 Cholula」は、イパノアメリカの自然を19世紀らしい色彩と時間の変化を取り込んだ視覚描写によって鮮やかに描き出した作品として、高く評価されている。全体の着想においてはフランスの啓蒙思想家ヴォルネの名著『遺跡』の影響が明らかだが、その文章の美しさでただのイミテーションにはとどまっていない。

一方「ナイアガラ」は、エレディアが1824年6月15日にこの滝を訪れた時の記憶に基づいた作品^{*41}で、執筆年月ははっきりしていないが、翌25年に出版された『詩集』に収録されている。この当時ニューヨークで亡命生活を送っていたエレディアの望郷の念と自然への驚嘆の思いが、うまく結びついて表現されている。終盤恋人がいないことを嘆く部分はやや脱線した印象を与えるが、この作品でも大部分を占める自然描写の鮮やかさが高く評価されている。エレディアがナイアガラを訪れたのは、当時一世を風靡していたシャトブリアンの『アタラ』にこの滝が登場するからだが、エレディアの名声が今度は以後のイパノアメリカ詩人たちの間に、ナイアガラをテーマとして詩や文章を物する伝統を生み出してゆく。キューバ出身のゴメス・デ・ラ・アベリャネーダ、ホセ・マルティ、ベネズエラのペレス・ボナルデらが、かくしてナイアガラを詣で作品を生み出すことになったのである。

“En el teocalí de Cholula”

「 Cholula 神殿にて」

¡Cuánto es bella la tierra que habitaban
los aztecas valientes! En su seno
en una estrecha zona concentrados
con asombro se ven todos los climas
que hay desde el Polo al Ecuador.
Sus llanos

勇猛なるアステカ族の住まいし土地の、
如何に美しきことか！ その胸元では
狭き地域に集められ、
極地から赤道地帯に至るあらゆる気候が
驚きと共に見られる。その平野を

^{*41} Heredia y Heredia, José María. *Antología herediana*. ed. de Emilio Valdés y de Latorre, La Habana: Consejo Corporativo de Educación, Sanidad y Beneficia, 1939. pp. 115-118. 参照。エレディアはこの友人への手紙でその場で詩を書いたと記しているが、それが完成された「ナイアガラ」とどの程度一致するのかわからない。

cubren a par de las doradas mieses
las cañas deliciosas. El naranjo
y la piña y el plátano sonante,
hijos del suelo equinoccial, se mezclan
a la frondosa vid, al pino agreste,
y de Minerva el árbol majestuoso.
Nieve eternal corona las cabezas
de Iztaccihual purísimo, Orizaba
y Popocatepetl, sin que el invierno, [sic.]
toque jamás con destructora mano
los campos fertilísimos, do ledo
los mira el indio en púrpura ligera
y oro teñirse, reflejando el brillo
del sol en occidente, que sereno
en yelo [sic.] eterno y perennal verdura
a torrentes vertió su luz dorada,
y vio a Naturaleza conmovida
con su dulce calor hervir en vida.

Era la tarde; su ligera brisa
las alas en silencio ya plegaba
y entre la hierba y árboles dormía
mientras el ancho sol su disco hundía
detras [sic.] de Iztaccihual. La
nieve eterna,
cual disuelta en mar de oro, semejaba
temblar en torno de él; un arco inmenso
que del empíreo en el cenit finaba,
como espléndido pórtico del cielo,
de luz vestido y centellante gloria,
de sus últimos rayos recibía
los colores riquísimos. Su brillo
desfalleciendo fue; la blanca luna

金色の穂と同時に、
美味し砂糖黍が覆う。
赤道直下の地の子であるオレンジと
パイナップルと音高きバナナが、
葉の茂りし葡萄と、野生の松と、
ミネルヴァの威風堂々たる木と混じり合う。
万年雪が純粹極まりない
イシュタクシフル山とオリサーバ山、
ポポカテペトル山の頭を飾るが、
冬は破壊をもたらす手で
いと豊穡なる野に触れることは決してない。
そこではほがらにインディオが薄紫と
金色に、西日の輝きを映して
それらが染まるのを見る。太陽は
静かに久遠の氷と永久の緑に
滝の如く黄金色の光を注ぎ、
揺るがされた自然がその優しき熱を受け、
命に沸き立つのを見た。

暮れ方であった。かろき微風は
翼をはや沈黙のうちに折り
草々と木々の間に眠っていた。
かたや大きな太陽はその円盤を
イシュタクシウアル山の彼方に沈めて
いった。
万年雪は、黄金の海に溶け込みし如く、
山の周りで震えるかに見えた。
天空の頂点に薄れゆく巨大なアーチは、
輝ける空の柱廊の如く、
光と煌めく栄光に身を包み、
太陽の最期の輝きから
いと豊かなる色彩を受けていた。
その輝きは薄れていった。白い月と

y de Venus la estrella solitaria
en el cielo desierto se veían.
¡Crepúsculo feliz! Hora más bella
que la alma noche o el brillante día,
¡cuánto es dulce tu paz al alma mía!

Hallábame sentado en la famosa
Choluteca pirámide. Tendido
el llano inmenso que ante mí yacía,
los ojos a espaciarse convidaba.
¡Qué silencio! ¡Qué paz! ¡Oh! ¿Quién
diría
que en estos bellos campos reina alzada
la bárbara opresión, y que esta tierra
brota mieses tan ricas, abonada
con sangre de hombres, en que fue
inundada
por la superstición y por la guerra...?

Bajó la noche en tanto. De la esfera
el leve azul, oscuro y más oscuro
se fue tornando; la movible sombra
de las nubes serenas, que volaban
por el espacio en alas de la brisa,
era visible en el tendido llano.
Iztaccihual purísimo volvía
del argentado rayo de la luna
el plácido fulgor, y en el oriente,
bien como puntos de oro centelleaban
mil estrellas y mil... ¡Oh! ¡Yo os saludo,
fuentes de luz, que de la noche umbria
ilumináis el velo
y sois del firmamento poesía!

孤独なウェヌスの星が
広漠たる空に見えた。
幸福な黄昏よ！ 愛する夜や
輝ける昼よりも美しき時よ、
汝が平穩は我が魂に如何に甘きことか！

我は著名なる Cholteca の
ピラミッドに座しありき。我が前に
広大な平原が長々と横たわり、
視線を遙かに彷徨わせよと誘えり。
何という静寂！ 何という平和！
おお！ 誰ぞ言わん、
この美しき野に野蛮な抑圧が
傲慢にも支配し、この地が
かくも豊かな穂を芽吹かせるのは、
迷信と戦争によって溢れかえりし、
人々の血によって肥やされし故とは…？

その間に夜となった。天空の
薄い蒼は、暗くより暗く
変わっていった。空間を
微風の翼に乗って飛ぶ、
静かな雲の動く影が、
広がる平原の上に見て取れた。
いと純なる イシュタクシワル山は
白銀の月影の穏やかな
輝きを返し、東方には、
金の点の如く鮮やかに千の
さらに千の星が瞬いていた…おお！
我はそなたらに挨拶を送る、
光の泉、暗き夜のヴェールを照らし
天空の詩であるそなたらに！

Al paso que la luna declinaba,
y al ocaso fulgente descendía,
con lentitud la sombra se extendía
del Popocatepetl, y semejaba
fantasma colosal. El arco oscuro
a mí llegó, cubrióme, y su grandeza
fue mayor y mayor, hasta que al cabo
en sombra universal veló la tierra.

Volví los ojos al volcán sublime,
que velado en vapores transparentes,
sus inmensos contornos dibujaba
de occidente en el cielo.

¡Gigante del Anáhuac! ¿Cómo el vuelo
de las edades rápidas no imprime
alguna huella en tu nevada frente?
Corre el tiempo veloz, arrebatando
años y siglos, como el norte fiero
precipita ante sí la muchedumbre
de las olas del Mar. Pueblos y reyes
viste hervir a tus pies, que combatían
cual ora combatimos, y llamaban
eternas sus ciudades, y creían
fatigar a la tierra con su gloria.
Fueron: de ellos no resta ni memoria.

¿Y tú eterno serás? Tal vez un día
de tus profundas bases desquizado
caerás; abrumará tu gran ruina
al yermo Anáhuac; alzaránse en ella
nuevas generaciones, y orgullosas,
que fuiste negarán...

Todo perece

月が傾き、輝きつつ
西方に下ってゆくにつれて、
徐々にポポカテペトル山の影は広がり、
巨大な亡霊の如くなっていった。
暗きアーチが我に達し、
我を覆い、その巨大さは
さらに、さらに大きさを増し、ついには
宇宙的な影で大地を隠すに至った。

我は目を崇高なる火山に向けた。
山は透明な蒸気に閉ざされ、
その巨大な輪郭を
西の空に描いていた。
巨大なるアナウァク山よ！ 速き
世々の経過がそなたの雪置きし額に
何らの跡も残さぬのは如何なることか？
時は速やかに走り去る。猛々しい
北風が己の前に大海の
無数の波を急ぎ立てるが如くに、
年々と世紀を奪いつつ。民たちと王たちが
足下に沸き立つのをそなたは見た、
現在我々が戦うように戦い、その都を
永遠と呼び、地をしてその栄光に
飽かせんものと信じおりしを。
去りぬ——記憶すら残さず。

さらばそなたは常しえか？ おそらく
いつの日か深き基石より割れ落ちん。
そなたの巨大な廢墟は荒涼たる
アナウァク山を悩ません。その上に
新たな世代が立ち上がり、高慢にも、
そなたが存在したことを否定せん…

全ては滅びる、

por la ley universal. Aun este mundo
tan bello y tan brillante que habitamos,
es el cadáver pálido y deforme
de otro mundo que fue...
En tal contemplación embebecido
sorprendíome el sopor. Un largo sueño
de glorias engolfadas y perdidas
en la profunda noche de los tiempos,
descendió sobre mí. La agreste pompa
de los reyes aztecas desplegóse
a mis ojos atónitos. Veía
entre la muchedumbre silenciosa
de emplumados caudillos levantarse
el déspota salvaje en rico trono,
de oro, perlas y plumas recamado;
y al son de caracoles belicosos
ir lentamente caminando al templo
la vasta procesión, do la aguardaban
sacerdotes horribles salpicados
con sangre humana rostros y vestidos.
Con profundo estupor el pueblo esclavo
las bajas frentes en el polvo hundía,
y ni mirar a su señor osaba,
de cuyos ojos férvidos brotaba
la saña del poder.

Tales ya fueron
tus monarcas, Anáhuac, y su
orgullo,
su vil superstición y tiranía
en el abismo del no ser se hundieron.
Sí, que la muerte, universal señora,
hiriendo a par al déspota y esclavo,

普通の法則によって。我らが住まう
かくも美しくかくも輝けるこの世界さえ、
かつてありし別の世界の
蒼褪め歪みし骸なのだ…
かくなる黙想に没頭せりし
我を睡魔が襲えり。
時の深き夜に入り込み失われし
栄光の長き夢が我が上に降り来りき。
アステカの王たちの鄙びた栄華が
呆然たる我が眼前に広がれり。
静かなる大勢の
羽飾りを纏いし領主たちの中から
黄金と真珠、羽根で刺繍された
豪華な王座に野蛮な専制君主が
立ち上がるのを見たり、
そして戦を告げる法螺貝の音に合わせて
広大な行列が神殿へとゆっくり
歩みを進めるのを、そこでは人間の血が
顔と衣服に飛び散ったおどろしげな
神官たちが待ち受けていた。
深き驚きのうちに奴隷の民は
低き額を土埃に埋め、
主人を見ることすら憚れり。
その君主の熱き瞳からは
権力の残忍さが噴き出していた。

さるものは既に去りし、
そなたの君主たちも、アナウアクよ、
その高慢も、
その卑なる迷信と暴政も
非在の深淵へと沈潜せり。
さなり、世界の女主人である死は、
専制君主と奴隷の両方を傷つけることで、

escribe la igualdad sobre la tumba.
Con su manto benéfico el olvido
tu insensatez oculta y tus furoros
a la raza presente y la futura.
Esta inmensa estructura
vio a la superstición más inhumana. [sic.]
En[sic.] ella entronizarse. Oyó los gritos
de agonizantes víctimas, en tanto
que el sacerdote, sin piedad ni espanto,
les arrancaba el corazón sangriento;
miró el vapor espeso de la sangre
subir caliente al ofendido cielo,
y tender en el sol fúnebre velo,
y escuchó los horrendos alaridos
con que los sacerdotes sofocaban
el grito de dolor.

Muda y desierta
ahora te ves, pirámide. ¡Más vale
que semanas de siglos yazcas yerma,
y la superstición a quien serviste
en el abismo del infierno duerma!
A nuestros nietos últimos, empero,
sé lección saludable; y hoy al hombre
que ciego en su saber fútil y vano
al cielo, cual Titán, truena orgulloso,
sé ejemplo ignominioso
de la demencia y del furor humano.

(Diciembre 1820)

墓の上に平等を記す。
恵み深きマントによって忘却は
そなたの愚かさと暴戾を
現在と未来の種族から隠す。
この広大な構造物は
非人間的な迷信の最たるものが、
そこで王位に就くのを目撃せり。
神官が、憐憫も恐れもなく、
血塗れの心臓を引き抜く間、
瀕死の生贄があげる悲鳴を聞けり、
血の濃厚な蒸気が
侮辱された天へと温かくのぼり、
太陽の面に不吉なヴェールを広げるを
見たり、
そして神官たちが
苦痛の叫びをかき消すためにあげる
おぞましき叫びを聞けり。

黙し人気もなく
今そなたはある、ピラミッドよ。何十
世紀も
そなたが荒れ果てて横たわり、
そなたが仕えし迷信が
地獄の深淵で眠る方が遙かに良い！
我らがうら若き孫たちには、しかしながら、
有益な教訓たれ。そして今日取るに足らぬ
無益な知識に目を眩まされ、
タイタンの如く天に高慢に
大音声に呼ばわる人類には、
人間の狂瀾と暴戾の恥すべき例となれ。

(1820年12月)

“Niágara”

「ナイアガラ」

Dadme mi lira, dádmela, que siento
en mi alma estremecida, y agitada
arder la inspiración. ¡Oh! ¡cuánto tiempo
en tinieblas pasó, sin que mi frente
brillase con su luz...! Niágara undoso,
tu sublime terror sólo podría
tornarme el don divino, que ensañada
me robó del dolor la mano impía.

Torrente prodigioso, calma, calla
tu trueno aterrador: disipa un tanto
las tinieblas que en torno te circundan;
déjame contemplar tu faz serena,
y de entusiasmo ardiente mi alma llena.
Yo digno soy de contemplarte: siempre
lo común y mezquino dedeñando,
ansié por lo terrífico y sublime.
Al despeñarse el huracán furioso,
al retumbar sobre mi frente el rayo,
palpitando gocé: vi al Océano,
azotado por austro y proceloso,
combatir mi bajel, y ante mis plantas
vórtice hirviente abrir, y amé el peligro.

Mas del mar la fiereza
en mi alma no produjo
la profunda impresión que tu grandeza.
Serenos corres, majestuoso; y luego

我に豎琴を与えよ、我に与えよ、
我が揺すぶられ魂に、かき乱され
靈感が燃ゆるのを感じるのだ。おお！
如何に多くの時が
我が額がその光に輝くことなく、
闇のうちに過ぎたことか！
連立つナイアガラよ、
そなたの崇高なる恐怖のみが
苦悩の無慈悲な手が残忍に
我より奪いし聖なる賜物を
我に返すことができるだろう。

驚異的なる激流よ、静まれ、
恐るべき轟きを収めよ。いま少し
そなたの周りを囲む闇を払え。
我にそなたの穏やかな面を見つめさせ、
我が魂を燃ゆる興奮で満たせ。
我はそなたを見つめるに相応しき者なり。
常にありふれたさもしきものを軽蔑しつつ、
恐るべき崇高なるものを我は切に求めり。
猛り狂うハリケーンが襲いかかる時、
我が額の上に雷が轟く時、
戦きつつ我は歓べり。我は大洋を見たり、
南風と嵐に鞭打たれ、
我が乗船が闘うのを、そして我が足下に
沸き返る渦が口を開けるのを見たり、
そして危険を愛せり。
されど海の荒々しさも
我が魂にそなたの偉大さの如き
深き印象は残さざりき。
穏やかにそなたは流れる、堂々と。そして

en ásperos peñascos quebrantado,
te abalanzas violento, arrebatado,
como el destino irresistible y ciego,
¿qué voz humana describir podría
de la sirte rugiente
aterradora faz? El alma mía
en vago pensamiento se confunde
al mirar esa férvida corriente,
que en vano quiere la turbada vista
en su vuelo seguir al borde oscuro
del precipicio altísimo: mil olas,
cual pensamiento rápidas pasando
chocan, y se enfurecen,
y otras mil y otras mil ya las alcanzan,
y entre espuma y fragor desaparecen.

¡Ved! ¡llegan, saltan! El abismo horrendo
devora los torrentes despeñados:
crúzanse en él mil iris, y asordados
vuelven los bosques el fragor tremendo.
En las rígidas peñas
rómpele el agua: vaporosa nube
con elástica fuerza
llena el abismo en torbellino, sube,
gira en torno, y al éter
luminosa pirámide levanta,
y por sobre los montes que le cercan
al solitario cazador espanta.
Mas ¿qué en ti busca mi anhelante vista
con inútil afán? ¿Por qué no miro

ごつごつとした岩塊に打ち砕かれ、
引き攫われて、激しく身を投げる、
避けられぬ盲目の運命のように。
いかなる人間の声に描くことができようか、
吠えるが如き砂州の
恐るべき面を？ 我が魂は
この滾る流れを見て
模糊たる思いに狼狽え、
惑う視線はいと高き断崖の
暗き端にその飛躍を追わんと
虚しく望む。千の波が
素速き思いの如く過ぎながら、
ぶつかりあい、猛り、
次なる千の、さらなる千の波が
すぐさまそれに追いつき、
泡と轟音のうちに消えてゆく。

見よ！ やってくる、跳ぶ！
恐ろしき深淵が
転落する急流を呑み込む。
そこに千の虹が交錯し、耳を聳されし
森は凄まじき轟音を返す。
ごつごつとした岩に
水は碎ける。蒸気の如き雲が
しなやかな力を持ち
深淵を渦となって満たし、たち昇り、
旋回し、エーテルへと
輝けるピラミッドを建立し、
それを取り巻く山々の上で
孤独な狩人を驚かす。
しかしそなたに何を
我が切望する眼差しは
無益な熱意もて探し求めるか？ なぜ我は

alrededor de tu caverna inmensa
las palmas ¡ay! las palmas deliciosas,

que en las llanuras de mi ardiente patria
nacien del sol a la sonrisa, y crecen,
y al soplo de las brisas del Océano,
bajo un cielo purísimo se mecen?
Este recuerdo a mi pesar viene...
nada ¡oh Niágara! falta a tu destino

ni otra corona que el agreste pino
a tu terrible majestad conviene.
La palma, y mirto, y delicada rosa,
muelle placer inspiren y ocio blando
en frívolo jardín: a ti la suerte

guardó más digno objeto, más sublime.
El alma libre, generosa, fuerte,
viene, te ve, se asombra,
el mezquino deleite menosprecia
y aun se siente elevar cuando te nombra.

¡Omnipotente Dios! En otros climas
vi monstruos execrables,
blasfemando tu nombre sacrosanto,
sembrar error y fanatismo impío,
los campos inundar en sangre y llanto,
de hermanos atizar la infanda guerra,
y desolar frenéticos la tierra,
vilos, y el pecho se inflamó a su vista
en grave indignación. Por otra parte
vi mentidos filósofos, que osaban

そなたの巨大な洞窟の周囲に
椰子を見出さないのか？

ああ！ 素晴らしき椰子、
我が燃え立つ祖国の平原に
太陽の微笑みを受けて生まれ、大洋の
微風のそよぎを受けて育ち、
澄み切った空の下揺れる椰子を？
この思い出は我が意に反して訪れる…
何も、おおナイアガラ！

そなたの運命に欠けてはおらぬ、
野生の松以外の冠も
そなたの恐るべき威容には似合わず。
椰子、銀梅花、そして繊細な薔薇は、
軽薄な庭園での安逸な快樂と
柔弱な怠惰を触発すればいい。そなた
に運命は

より相応しく、より崇高な目的を用意した。
自由な、寛大な、勁き魂は、
到り、そなたを見、驚き、
卑賤なる快樂を軽蔑し、
そなたの名を呼ぶだけで
高められるかに感ずる。

万能なる主よ！ 他の地域で我は
おぞましき怪物を見たり、
神聖なる御名を冒しつ
過誤と冷酷な狂信の種を撒き、
野を血と嘆きで溢れさせ、
忌まわしい兄弟間の戦を煽り、
狂瀾のうちに大地を荒廃させるのを見たり、
そしてその光景に胸は
激しい怒りに膨らめり。他所にては
嘘つきの哲学者どもを見たが、彼らは

escrutar tus misterios, ultrajarte,
y de impiedad al lamentable abismo
a los míseros hombres arrastraban.
Por eso te buscó mi débil mente
en la sublime soledad: ahora
entera se abre a ti; tu mano siente
en esta inmensidad que me circunda,
y tu profunda voz hiere mi seno
de este raudal en el eterno trueno.

¡Asombroso torrente!
¡Cómo tu vista el ánimo enajena
y de terror y admiración me llena!
¿Do tu origen está? ¿Quién fertiliza
por tantos siglos tu inexhausta fuente?
¡Qué poderosa mano
hace que al recibirte
no rebose en la tierra el Océano?

Abrió el Señor su mano ominipotente;
cubrió tu faz de nubes agitadas,
dio su voz a tus aguas despeñadas,
y ornó con su arco tu terrible frente.
¡Ciego, profundo, infatigable corres,
como el torrente oscuro de los siglos
en insondable eternidad...! ¡Al hombre
huyen así las ilusiones gratas,
los florecientes días,
y despierta al dolor...! ¡Ay! agostada

あなたの神秘を探り出し、
あなたに乱暴を働こうと思いががり、
不信の嘆くべき深淵へと
哀れな人々を引きずりゆけり。
それ故に我が弱き心は
あなたを崇高なる孤独に求めたが、今や
完全にあなたに開かれており、あなたの手を
我を取り囲むこの広大さを感じ、
あなたの深き声は我が胸を
この瀑布の永久の雷鳴の中で傷つける。

驚くべき瀧よ！
そなたの光景はいかに心を恍惚とさせ
恐怖と驚嘆で我を満たすか！
そなたの源はいずこに？
何者がそなたの無尽の泉を
これほどの世紀にわたり
豊かにしてきたのか？
いかなる力ある手が
そなたを受け入れても大地に
大洋が溢れぬようにしているのか？

主はその全能なる手を開かれた、
そなたの面を沸き返る雲で覆われ、
その声を転げ落ちるそなたの水に与えられ、
その弓もてそなたの恐るべき額を飾られた。
盲目で、深く、疲れを知らず
そなたは流れる、
計り知れぬ永遠に行く
幾世紀の暗き流れの如く…！ 人間から
快き幻、花咲く日々は
かくの如く逃げ去り、
苦痛に目覚めん！ ああ！ 疲れ果て

yace mi juventud; mi faz, marchita;
y la profunda pena que me agita
ruga mi frente, de dolor nublada.

Nunca tanto sentí como este día
mi soledad y mísero abandono
y lamentable desamor... ¿Podría
en edad borrascosa
sin amor ser feliz? ¡Oh! ¡si una hermosa

mi cariño fijase,
y de este abismo al borde turbulento
mi vago pensamiento
y ardiente admiración acompañase!
¿Cómo gozara, viéndola cubrirse
de leve palidez, y ser más bella
en su dulce terror, y sonreirse
al sostenerla mis amantes brazos...!
¡Delirios de virtud...! ¡Ay! ¡Desterrado,
sin patria, sin amores,
sólo miro ante mí llanto y dolores!

¡Niágara poderosa!
¡Adiós! ¡Adiós! Dentro de pocos años
ya devorado habrá mi tumba fría
a tu débil cantor. ¡Duren mis versos
cual tu gloria inmortal! ¡Pueda piadoso
viéndote algún viajero,
dar un suspiro a la memoria mía!
Y al abismarse Febo en occidente,
feliz yo vuela do el Señor me llama,

我が青春は横たわり、我が面は穢れ果てる。
そして我を揺さぶる深き苦悩は
痛みに曇らされし我が額に皺を刻む。

この日ほど我が孤独と
惨めな放逐と嘆くべき愛の欠如を
感じしときはなかりき…
嵐荒ぶ年頃にありて
愛なくして幸福たりうるや？

おお！ もし麗人の
我が愛情を定め、
この深淵の騒然たる縁にて
我が漠たる思いと
熱き賛美に付き添いあれば！
いかなる喜びならん、彼女が
軽く蒼褪め、その甘き怖れにあつて
より美しく、そして恋する我が両腕が
その身を支えると微笑むのを見るは！
美德の錯乱…！ ああ！ 追放され、
祖国も、愛もなく、
ただ我が前には嘆きと苦痛を見るのみ！

力強きナイアガラよ！
さらば！さらば！ 数年後には
冷たき墓所がそなたの力弱き歌い手を
食らい尽くしておらん。

そなたの不滅の栄光の如く
我が詩の生き永らえんことを！
憐れみ深き
旅人ありて、そなたを眺め
我が思い出に溜息つかんことを！
そして太陽が西に沈む時、
幸せに我は主が呼ばれる所へと飛び、

y al escuchar los ecos de mi fama, 我が名声の木霊を聞いて、
alce en las nubes la radiosa frente. 雲間にて晴れ晴れと額をあげんことを。